

原 著

課題の目標設定に及ぼす内的基準と外的基準の効果

青 柳 肇* 井 原 由 貴**

The effects of Relative Evaluation and Absolute Evaluation on Setting Goal

Hajime Aoyagi*, Yuki Ihara**

Abstract

The purpose of this study was to examine the change of goal by effects of internal evaluation-oriented tendency and external evaluation-oriented tendency. In this study, internal evaluation-oriented tendency was defined as direction to evaluation that is not affected by external evaluations, which likes general standard and average score. And then, external evaluation-oriented tendency was defined as direction to external evaluation.

Participants were 136 male and 78 female college students. First, Internal Evaluation-Oriented Tendency Scale (IETS) and External Evaluation-Oriented Tendency Scale (EETS) were developed. And, on the bases of the results of two scales, 4 groups were constructed, namely H-H (High IETS, High EETS: N=11), H-L (N=11), L-H (N=11), L-L (Low IETS, Low EETS: N=12). Second, 2 kinds of digit symbol tasks were presented to 45 students of subjects who answered IETS and EETS. And then, after first task, operative average (score that each subject got at first task, + 10 scores) were presented to each subject. And they were asked to response the next goal. After that, the questionnaire was administered, the items of which was involved ones about the experiment, such as perceived success and its satisfaction.

Main results were as follows.

Low internal evaluation-oriented tendency was most influenced by operative average, independent of degree of external evaluation-oriented tendency. And besides, female had higher personal satisfaction and perceived success than male. It might suggest that external evaluation-oriented tendency included some specific aspects for female.

*人間基礎科学科

**Department of Basic Human Science*

**早稲田大学大学院人間科学研究科修士課程

***Graduate School of Human Sciences,*

Waseda University

※ 本研究は1997年度 特定課題研究の助成 (97A - 186) を受けて行われた。

問題と目的

課題遂行と目標の関係については、古くから要求水準の研究のなかで行われてきた。その初期の研究で、Lewinは要求水準の昇降の過程にはパーソナリティの個人差が反映することを示した(Lewin,K.1935)。ここでの個人差は、学校での過去の成功や失敗経験が関係し、それが重要な目標設定の決定因になるとしている(Lewin,K.1944)。ほぼ同時期に、Rotterは社会的事象に対する価値の置き方の個人差との関係を示し、個々人の目標設定はその個人の準拠集団の平均に近づけることをみている(Rotter,J.B.1942)。また、要求水準の研究とは別の文脈で、達成動機研究のなかでも行われていた。その中でAtkinsonは、成功志向動機と失敗回避動機の間を生ずる葛藤が遂行水準を下げることを示している(Atkinson,J.W.1960,1964,1974; Atkinson,J.W.&Feather,N.T.,1966)。また、達成動機の性差を扱う研究として、Hornerは、有能で達成動機の高い女性は、異性と競争する場面において、周囲の期待の影響を受け、成功志向動機を下げるなどの成功回避行動をとることを示した(Horner,M.1968)。

これらの研究から派生した目標と課題遂行に関する最近の研究として、目標理論(goal theory)がある。これは個人が設定する目標の意味づけによって、達成行動が異なるとするもので、Nichollsが提唱した理論である(Nicholls,J.G.1984)。Nichollsは、達成目標(achievement goal)を状況変数と特性変数の双方からの検討を行なっている。そのうちの状況変数に関しては、課題関与(task-involvement)と自我関与(ego-involvement)の存在を、特性変数に関しては課題志向性(task orientation)と自我志向性(ego orientation)の存在を挙げる。この両者の関係は、状況によって個人の特性が顕著に表出するとされている。このことは、自我関与的でない状況において、課題志向的な者は自我志向的な者よりも遂行が上昇するという結果を示した実験により証明された(Meece,J.L., Blumenfield,P.C.,&Hoyle,R.H.1988; Nolen,B.1988)。

また、目標理論に関しては、Dweckも学習性無力感研究から、独自に理論を構築している

(Dweck,C.S.1986)。Dienerと行なった研究では、無力感型と習熟志向型というパーソナリティ特性の差異による失敗経験後の遂行と目標を設定する際の方略に影響を及ぼすことを示している(Diener,C.I.&Dweck,C.S.1978)。その後の一連の研究の中でDweckは、この差異の根元が能力についてのメタ理論とも言える暗黙の知能観(implicit theory of intelligence)により生ずることを述べている(Dweck & Bempechat,1983; Leggett,1985)。近年では、知能観だけではなく、向社会性、身体技能、身体的外見の認知における暗黙の理論についての研究を展開しており(Bempechat, London & Dweck,1991)、またその源泉を探る試みを行なっている(Heyman,Dweck & Cain,1992)。

このように、これまで課題遂行と目標の関係は、様々なパーソナリティ特性の差異により説明されてきた。同時に、従来の目標設定行動で中心的に検討されてきた変数は、自己の「遂行結果」に関したもので、「成功感・失敗感」「課題の困難度」「能力・努力の帰属」「課題の重要度」等であった。近年になって、先に述べたDweckが、「他者からのよい評価を得ようとし、悪い結果を避けようとする」という遂行目標(performance goal)の概念を提唱し、目標設定行動に社会的要因の介在を考慮したモデルを提起した(Dweck,C.S.1986)。しかし目標設定行動に社会的要因を考慮した研究は依然として少ない。目標設定に際しては、自己の遂行結果あるいはそれと関係した要因ばかりではなく、他者の遂行結果や他者の存在に基づく判断や決定も考えられる。日常的な例として、「クラスの平均点より高い点を取ろう」や「クラスの中で目立ちたくないから平均に近い点を取ろう」といった目標設定などがあげられる。こうした周囲の人間を意識した目標設定行動は、従来の「達成動機」をはじめとする諸理論のなかでは、他者との競争という場面設定での研究でわずかに見られるが、中心的には考慮されなかった要因である。

そこで本研究では、自己の過去の成績や能力などを意識して目標を設定する傾向と他者を意識して目標を決定する傾向をパーソナリティ変数、すなわち各々前者を内的基準志向傾向、後者を外的基準志向傾向とし、その各傾向が目標設定に際して作用すると捉えた。また、この二つの傾向は、

個人内に共存し得るものであろうと推測した。たとえば、他人の成績を意識しながらも自己の成績に基づいて目標設定するというのは、我々が日常的に行っていることである。そこで、ここでは内的基準志向傾向と外的基準志向傾向は両極の傾向ではなく、それぞれ独立したものと考えることと

した。

本研究の第一の目的は、内的基準志向傾向と外的基準志向傾向の尺度の作成である。その上で第二の目的として、以下の仮説を検証することとした。また、それをまとめたものをFigure1にあげる。

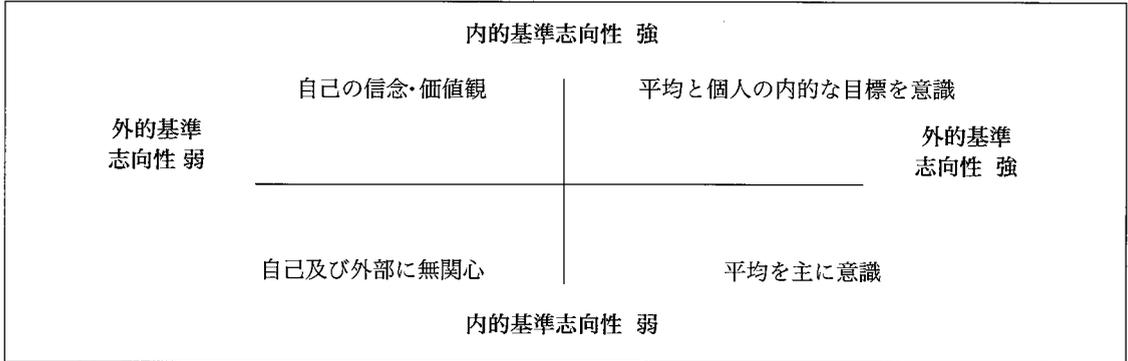


Figure 1 学習場面における内的基準志向性と外的基準志向性の関連モデル

<仮説>

- 1, 内的基準志向傾向・外的基準志向傾向のいずれの傾向も強い者は、自己の遂行と他者の遂行（平均）の中間程度に目標設定を行うであろう。
（個人の内的基準及び外的基準の双方への意識が強いので、両者とも考慮に入れた目標設定を行なうと考えたため）
- 2, 内的基準志向傾向が強く外的基準志向傾向が弱い者は、自己の遂行に近いところに目標設定を行うであろう。
（個人の内的基準への意識が顕著に強いので、外的基準は考慮に入れずに目標設定を行なうと考えたため）
- 3, 内的基準志向傾向が弱く外的基準志向傾向が強い者は、他者の遂行（平均）に近いところに目標設定を行うであろう。
（外的基準への意識が顕著に強いので、個人の内的基準は考慮に入れずに目標設定を行なうと考えたため）
- 4, 内的基準志向傾向・外的基準志向傾向のいずれの傾向も弱い者は、明確な目標がないため、目標自体が低く不安定であろう。
（個人の内的基準及び外的基準の双方への意

識が弱いのは、目標を設定する基準を持ちにくいだらうと考えたため）

以上の他に、付加的に性差及び主観的成功感（課題に対する被験者個人の、主観的な成功に関する認知）などについても検討した。

また、ここでは内的基準は課題での自己の成績とし、外的基準は課題での他者の成績とした。ただし、他者の成績は、便宜上特定の他者ではなく、他者一般すなわち成績の平均得点とした。

実験1. 目標尺度の作成

方法

- (1)被調査者:埼玉県下私立大学大学生計214名(内男子136名女子78名)
- (2)調査日:1997年9月26日
- (3)調査場所:心理学講義の終了後、教室内で行われた。

①外的基準目標尺度

学習・達成場面を想定した外的基準志向を持つ傾向の強弱を測定する内容の質問項目（14項目）を独自に作成した。回答は5件法で、得点の範囲は1点～5点である。

②内的基準志向尺度

同じく、学習・達成場面を想定した内的基準志向を持つ傾向の強弱を測定する内容の質問項目（15項目）を独自に作成した。回答は5件法で、得点の範囲は1点～5点である。

結果

以上の調査から得られた内的基準目標及び外的基準目標尺度の合計29項目の測定結果は、以下の

ように処理された。項目の選定を行なうために各尺度とも別々に因子分析を行なった。主因子解に基づき、バリマックス回転を行なった。解釈がしやすかったこと及び本尺度の概念を考慮して、いずれも2因子に決定した。説明率は、内的基準目標は42.6%、外的基準目標尺度は36.3%であった。その後Table.1とTable.2に、各因子負荷量の高いものから順に示した。

Table.1 内的基準目標尺度因子分析結果

	質問項目	内的基準志向の確立因子	自己信頼因子
内的基準志向の確立因子	3. 私は、自分が持っている能力や実力を、正しく理解できていると思う。	0.72826	0.10279
	2. 私は、他者からの評価と関係なく、自分の成績を評価できる。	0.68809	0.24909
	1. 私は、自分なりの目標を持って物事に取り組む方だ	0.66175	0.03211
	13. 私は自分の成績や仕事などを、自分で評価できない。(N)	0.64881	0.14008
	11. 私は自分の能力や実力がどの程度あるのか、分からない。(N)	0.63489	0.10024
	8. 何かの課題に取り組む時、目標など立てず、いつも行き当たりばったりでやっている。(N)	0.54198	-0.17036
	7. 私はいつも、自分が持っている目標にあわせて、自分の成績や仕事の成功・失敗を判断している。	0.48912	0.15961
自己信頼因子	14. 試験の時、他人の成績や平均点などに、特に興味はない。	0.14899	0.74252
	12. 試験で悪い点を取っても、自分の力を発揮できたと思える時は、満足できる。	0.02016	0.64015
	10. 私の成績が例え平均的な水準に達していなくても、自分の目標を超えていれば、納得できる。	0.04480	0.57568
	4. 他人の成績は、私の成績とは関係のないものだから、特に興味はない。	0.2930	0.50625

(N)逆転項目

内的基準目標尺度の因子構成項目の内容を検討すると、第1因子に関しては、個人内に絶対的な基準を持ち、それを常に意識しているという内容を含むと考え、「内的基準の確立因子」と命名した。第2因子は第1因子に含まれる傾向であるが、課題遂行場面において自己が行なった遂行や結果への自己信頼による評価を行なうという内容を含むと考え、「自己信頼因子」と命名した。

外的基準目標尺度に関しては、第1因子を課題遂行場面に関連する行動において同調性を示す内

容を含むものと考え、「同調行動因子」と命名した。第2因子は、他者の成績や特に平均などに対する意識の強さを表す内容を含むと考え、「平均志向因子」と命名した。

次に、前述の因子分析の結果に基づき、各尺度の構成因子に関する性差の検討を行うため分散分析を行なった。内的基準目標（「内的基準の確立因子」及び、「自己信頼因子」の合計得点・各因子ごとの合計得点）に関しては、いずれの分析の結果にも有意な差がみられ、男性のほうが女性よりも

Table.2 外的基準目標尺度因子分析結果

	質問項目	同調行動因子	平均志向因子
同調行動因子	10. 友達よりも良い成績をとった時、「まぐれだ」と、弁解しないと落ち着かない。	0.61890	-0.01976
	11. 自分の興味のある分野の勉強よりも、周りの友達がやっているのと同じものを勉強したいと思う。	0.58523	0.00859
	5. 自分が好きな勉強や興味を持っていることは、人に「変わっている」と思われる気がして、話せない。	0.58460	0.02924
	13. 友達よりずっと良い成績をとると、次回は友達と同じくらいの成績に落としたいと思う。	0.53909	0.10253
	7. みんながやる気がない場面（勉強など）で、自分だけやる気を出すのは悪いような気がする。	0.49262	0.02432
	8. テストの成績は、友達と同じくらいの点数の方が安心する。	0.40921	0.10835
	3. 自分の好きな授業で本当は出席したくても、友達がサボると言えば、一緒にサボってしまうことが良くある。	0.40290	0.09770
平均志向因子	6. テストの時は、友達の点数や平均点が気になる。	0.18643	0.85125
	1. 他人の学業成績が気になる。	0.09177	0.55394

「内的基準の確立因子」の得点が強い傾向にあり ($F(1,212)=3.35$ $P<.10$)、また「自己信頼因子」の得点も男性が強い ($F(1,212)=49.74$ $P<.05$) ことが示された。また両因子合計得点でも、男性のほうが女性よりも内的基準目標を強く持つということが示された ($F(1,212)=6.02$ $P<.05$)。外的基準目標（「同調行動因子」及び「平均志向因子」の合計得点・各因子ごとの合計得点）に関しては、「平均志向因子」に関してのみ有意な性差の傾向がみられ、女性のほうが男性よりも強い傾向がみられた ($F(1,212)=13.06$ $P<.10$)。

また、内的基準目標尺度と外的基準目標尺度の関係を見るため、各尺度の構成因子の合計得点を求め、それをもとにピアソンの積率相関係数を算出し、相関を求めた。その結果、有意な負の相関がみられた ($r=-0.438$, $p<.01$)。有意ではあったが、相関係数は $r=0.500$ 以下と低く、二者の関係は強いものではなく、一応の独立性があると判断した。

実験 2. 基準志向と課題の目標設定

方法

(1)被験者：埼玉県下私立大学大学生計45名（男子18名、女子27名）

(2)実験日：1997年11月5日～15日

(3)実験場所：埼玉県下私立大学構内実験室

(4)実験材料：実験用の課題：WISC-Rの符号課題2種 (Figure 2 参照)

(5)手続き

実験1で作成された2つの尺度に基づき、両尺度とも平均より1 S.D.以上の者と1 S.D.以下の者により、次の4群を設定した。

- ①H-H群 (内的基準志向 高-外的基準志向 高)
- ②H-L群 (内的基準志向 高-外的基準志向 低)
- ③L-H群 (内的基準志向 低-外的基準志向 高)
- ④L-L群 (内的基準志向 低-外的基準志向 低)

各群は以下のように実験を施行された。

I. 第1課題

課題は最初の5問は回答例を提示し、1行に20問、6行に書かれている。第1課題では、相対的基準を提示した後の被験者の遂行目標を測定し、第2課題は第1課題との比較で課題遂行量の変動率を測定するために行なった。

第1課題を被験者に提示し、次のような教示を与えた。

「この課題は、数的処理能力に関する課題です。出来る限りたくさん解くように頑張ってください。」

をそれぞれをどの程度意識したのか、また、課題遂行についての満足度や成功感を問う、というものになっている。基準の意識度及び満足度に関しては、回答は5件法で行われ、各基準への意識の高い方から5点～1点が与えられた。成功感に関しては、回答は2件法で、「成功」には1点、「失敗」には0点が与えられた。

第2課題終了後、既述の内省への回答を被験者に求めた。被験者の回答の終了後、第1課題後に提示した平均の数は実験上の操作であって、実際の数字ではないことを被験者に告げ、実験への参加の謝辞を述べ、実験を終了した。

結果

(1)第1課題遂行量、目標と第2課題遂行量

結果は、内的基準目標と外的基準目標を独立変数にし、第1課題の遂行量、目標、被験者の第2課題を従属変数にし、それぞれ2要因の分散分析を行なった。

第1課題遂行量 (F(1,43)=4.92 P<.05) 及び第2課題遂行量 (F(1,43)=4.27 P<.05) に関しては、外的基準目標H群の方がL群に比べて遂行量が高かった。目標数に関しては外的基準目標H群の方がL群に比べて高い目標を設定する傾向があった (F(1,43)=3.89 P<.10)。また、内的基準目標と内的基準目標及び外的基準目標の交互作用にはいずれも有意な差はみられなかった (Table.3参照)。また、内的基準目標と外的基準目標の交互作用にはいずれも有意な関係はみられなかった。

性別に関する検討も行ったが、第1課題

Table.3各群の1回目の課題の遂行量・目標・2回目の課題の遂行量 (平均とS.D.)

外的	内的	N	第1回 課題遂行量		目標		第2回 課題遂行量	
			Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
H群	H群	11	41.00	6.39	48.82	8.74	53.82	7.14
H群	L群	11	40.64	6.82	49.45	6.96	52.00	8.15
L群	H群	11	34.64	6.58	43.27	8.33	47.18	7.81
L群	L群	12	38.42	5.68	45.83	6.67	49.67	5.53

(F(1,43)=9.65 P<.01)、目標数 (F(1,43)=4.93 P<.05)、第2課題 (F(1,43)=6.33 P<.05) のすべてに関して、女性の方が男性に比べて高い遂行量

を示し、かつ高い目標を設定していた (Table.4参照)。

(2)実験後の内省について

Table.4性別毎の1回目の課題の遂行量・目標・2回目の課題の遂行量 (平均とS.D.)

性別	N	第1回 課題遂行量		目標		第2回 課題遂行量	
		Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
男	18	35.22	5.52	43.78	7.91	47.44	7.06
女	27	40.96	6.41	48.85	7.24	52.78	6.90

次に、実験後に被験者に回答を求めた回答用紙の結果をもとに、分散分析を行なった。独立変数を外的基準目標と内的基準目標にし、従属変数を実験後の内省報告の内容の各々の項目として、2要因の分散分析を行なった。目標設定基準では、

課題遂行の際に行なった、目標を決定する時の外的基準への意識の強さに関して、有意な傾向がみられた。以下に有意差のみられた目標を設定した基準 (外的基準) への意識の強さに関する分散分析の結果のみを挙げる。外的基準目標の高低に関

わらず、内的基準志向性が低い人が、最も外的基準を意識する傾向がある (F(1,43)=2.87 P<.10) という結果が得られた (Table.5 及びFigure 3 参照)。

Table.5 目標を決定した際の平均的基準への意識の強さ(平均とS.D.)

外的	内的	N	Mean	SD
H群	H群	11	3.45	1.51
H群	L群	11	4.45	0.52
L群	H群	11	4.20	0.63
L群	L群	12	4.23	0.83

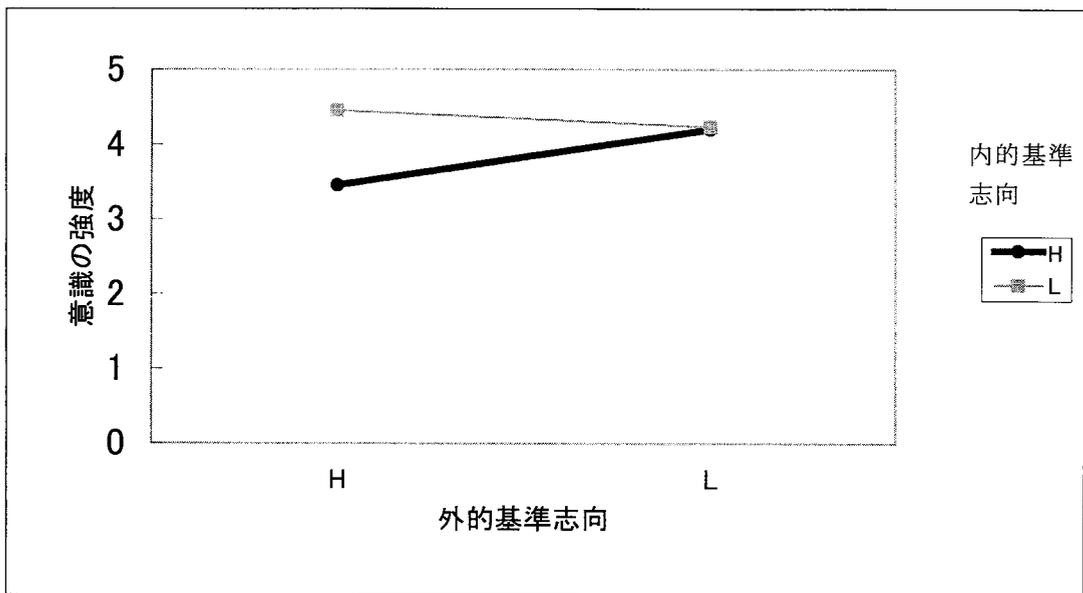


Figure 3 目標を決定した際の平均的基準への意識の強さに関する交互作用

次に実験の結果と同様、性別を独立変数に、実験後の質問紙に関して分散分析を行なった。性別に関しては、課題を終えた後の満足度と課題の主観的な成功感に有意差がみられ、女子のほうが男子に比べ、課題を終えた後の満足度が高かった (F(1,43)=6.58 P<.05)。また、女子の方が課題の主観的成功感についても有意に高かった (F(1,43)= 4.65P<.05)。

考察

本研究で用いた外的基準目標尺度・内的基準目標尺度は、性格特性のパターンにより目標設定に

おける方略や課題遂行を予測するために作成した。なぜならこの両傾向は、目標設定において最も適応的な性格特性のスタイルや、目標設定方略の発達の過程を検討する上において重要な傾向であり、またこれを測定するための尺度が必要であると考えたためである。さらに、この性格特性は達成動機の性差に関連するものと考えられたため、各尺度及び各因子ごとの性差を検討した。2つの尺度のうち、内的基準目標は男子の方が高く、成績の自己信頼を持ち、内的基準目標を確立しているといえる。一方、外的基準目標は、女子の方が高く、成績に対する外的基準への意識を強く持つ傾向がみ

られた。

ここでの内的基準志向に関する傾向に関して男子の方が有意に高く、外的基準志向における成績の外的基準意識傾向に関して、女子の方が高いという結果は、達成及び学習場面における男女間の、目標設定の特性の差を表すものであると考えられる。Horner (1968) は、達成動機の性差を扱い、女性の特性的な成功回避動機について言及し、女性は達成水準を下げるなどの成功回避行動をとるものとしたが、既述の結果からその他の要因として、男子の方が個人内に設定された目標を強く意識し、自己の成績やテストなどの結果に関しても自己の基準をもとに価値判断を下すのに対し、女子の方は一般的に提示された平均などの外的基準に基づき目標設定を行なうという差があるという可能性があげられる。

課題場面に関しては、外的基準志向の高い者は、低い者に比べて課題の遂行量が多く、目標に関しても高く目標を設定している傾向があった。ここで内的基準志向に差がみられなかった理由として、本実験が、内的基準志向を持つ意識の強弱にのみ着目し、個人が持つ目標水準の高低に関しては考慮に入れなかったため、内的基準志向を持つ意識は強いが、設定する目標の水準が低い被験者が多く、課題の遂行量や目標の設定が全般に低かったという可能性が考えられる。それに対して、外的基準志向は、一般的な基準を意識するために、その個人の持つ目標の高低ではなく、一般的な基準に影響され、それを意識するために課題の遂行量や目標の設定がH群の方が高くL群の方が低いという結果が得られたものと考えられる。

また、一般に、内的基準を持つことは個人にとって適応的であるとされてるが、課題の遂行量という点から考えると、外的基準志向傾向も動機づけを高めるといえる可能性があるといえる。このことは、Dweck (1998) が外的基準とも規定し得る遂行目標 (performance goal) が、課題遂行への有効性を認める見解と一致しており、一層の検討の必要性を示すものである。

尺度得点の分析において、性別の差がみられたので、第1課題の課題遂行量・目標・第2課題の課題遂行量についても分析を行なった。その結果としていずれの場合に関しても、女子の方が男子

に比べて、課題遂行量も目標設定も高かった。今回の実験で使用した課題の性質 (符号課題) が、女子に有利なものであったか、あるいは課題に取り組む意識や姿勢が、女子の方が男子に比べて積極的であったという可能性が考えられるが、今後の検討課題である。

実験終了後内省報告である、目標設定時の外的基準への意識及び内的基準への意識の強弱、また課題への満足度、課題の主観的成功感については、外的基準志向傾向の高低とは関係なく内的基準志向傾向が低い人が、最も外的基準を意識する傾向があるという結果が得られた。

しかし、仮説で述べた他の事柄についてはいずれも仮説を支持する結果はみられず、また、外的基準志向および内的基準志向のいずれの傾向に関しても傾向による行動パターンの予測はできなかった。この原因に関しても、被験者にとっての課題の重要性、実験において提示する外的基準の設定、被験者の質 (環境など) 等、今回行った実験の問題点なども考えなければならない。

次に課題への満足度及び課題の主観的成功感は、いずれに関しても大きな違いはみられなかった。一方、性差ではいずれに関しても女子のほうが男子に比べ、課題を終えた後の満足度が高く、課題の主観的成功感に関しても成功感が高いといえる。

先にも述べたが、実験上において、男女ともにほとんどの被験者が、第2課題遂行数においては提示された外的基準の値 (被験者の第1課題遂行数+10) を上回っていた。また、被験者が設定した目標に関しても、第2課題ではそれを上回るか、それと同数の遂行量がみられ、課題の練習効果が考えられた。しかし同時に、被験者の実験後の感想にもあった通り、「外的基準」を与えられることで、被験者の課題への客観的な困難度が変化することも一つの理由であると考えられる。いずれにせよ、課題遂行において「外的基準」や自己の目標を超えているという点に関しては、ほとんどの被験者が等質の結果を得たと考えてよい。

以上のようなことから、全般に女子のほうが男子に比べ、外的基準を意識する、あるいは外的基準に合わせようとする傾向が高く、それによって自己の課題の成功や失敗を決定するようである。さらにそのような点から、外的基準志向や内的基

準志向といったパーソナリティ変数を独立変数にした分析において、基準への意識の違いがみられなかったのは、女子の特有的な外的基準目標志向による可能性があり、今後の研究課題である。

要約

本研究は、課題遂行場面において外的基準志向（一般的基準や平均といった相対的基準を意識する）傾向および内的基準志向（外部の基準に左右されない個人の中にある絶対的基準を意識する）傾向を個人の特性と捉え、各傾向の課題への目標設定の基準や目標、課題遂行量の関係を検討することを目的とした。

大学生214名を対象に、外的基準志向および内的基準志向の尺度を作成し、それにより測定した。その後、各傾向の得点の高低に基づいてH-H（外的基準志向 強・内的基準志向 強、N=11）、H-L（N=11）、L-H（N=11）、L-L（外的基準志向 弱・内的基準志向 弱、N=12）の4群を設定した。各群合計45名を対象に志向性が課題の目標と遂行にどのように影響するか検討する為に個別実験を行なった。符号課題を被験者に遂行させ、恣意的な外的基準を提示した。その後、次回の遂行目標を設定させ、同種の課題を再度遂行させた。

各被験者の、外的基準志向傾向の得点の高低に関わらず、内的基準志向傾向が低い傾向の者が外的基準を最も意識するという結果は得られたが、傾向と実際の行動の関連や、他の傾向に関しての検証は有意な結果が得られなかった。この原因として被験者にとっての課題の重要性、実験において提示する外的基準の設定、被験者の属性等、本実験の問題点なども考えなければならない。また、性差に関して課題への満足度及び課題の主観的成功感は、全般に女子のほうが男子に比べ、課題を終えた後の満足度が高く、課題の主観的成功感に関しても高いという結果が得られた。これは個人の遂行が外的基準を上回るという状況における、女子特有の外的基準志向傾向と考えられた。

参考・引用文献

- Atkinson,J.W. (1964) An introduction to motivation, New Jersey: Van Nostrand.
 Atkinson,J.W. (1974) Strength of motivation and

efficiency of performance.

In J.W. Atkinson & J.O. Atkinson Motivation and achievement. Winston & Sons.

Atkinson,J.W.,&Litwin,G.H. (1960) Achievement motive and test anxiety conceived as motive to approach success and motive to avoid failure. Journal of Abnormal and Social Psychology,60,52-63

Atkinson,J.W.,&Feather,N.T. (1966) A theory of achievement motivation. New York: Wiley

Bempechat,J, London,P.,&Dweck,C.S (1991) Children's conceptions of ability in major domains : An interview and experimental study. Child Study Journal,21,11-36

Buss,A.H. (1986) Social Behavior and Personality, Lawrence Erlbaum Associates.

大淵憲一 対人行動とパーソナリティ 北大路書房

Diener,C.I.&Dweck,C.S. (1978) An analysis of learned helplessness: Continuous changes in performance, strategy, and achievement cognitions following failure. Journal of Personality and Social Psychology,36,451-462

Dweck,C.S. (1986) Motivation processes affecting learning. American Psychologist,41,1040-1048

Dweck,C.S.,&Bempechat,J. (1983) Children's theories of intelligence: Consequences for learning. In S. Paris, G. Olson & H. Stevenson (Eds.) Learning and motivation in the classroom. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.

Heyman,G.D.,Dweck,C.S.,&Cain,K.M. (1992) Young children's vulnerability to self-blame and helplessness: Relationship to beliefs about goodness. Child Development,63,401-415.

Dweck,C.S. (1998) The costs and benefits of performance goals: symposium : International conference on the application of psychology to the quality of learning & teaching.

Horner,M.S. (1968) Sex differences in achieve-

ment motivation and performance in competitive and non-competitive situations. Unpublished doctoral dissertation, University of Michigan.

Leggett,E.L. (1985) Children's entity and incremental theories of intelligence: Relationships to achievement behavior. Paper presented at the annual meeting of the Eastern Psychology Association,Boston.

Lewin,K.(1935) A dynamic theory of personality : selected papers / by Kurt Lewin ; translated by Donald K. Adams and Karl E. Zener. New York : McGraw-Hill,

Lewin,K.,Dembo,T.,Festinger,L.,&Sears,P.S.(1944) Level of aspiration. In J.Mv.Hunt (Ed.); Personality and the behavioral disorders,vol.1, New York;Ronald Press

Meece,J.L.,Blumenfield,P.C.,&Hoyle,R.H. (1988) Students' goal orientations and cognitive engagement in classroom activities. Journal of Educational Psychology,80,514-523

中村陽吉(1990)「自己過程」の社会心理学 東京大学出版会

Nolen,B (1988) Reasons for studying: Motivational orientations and study strategies. Cognition and Instruction,5,269-287

Nicholls,J.G. (1984) Achievement motivation: Conceptions of ability,subjective experience, task choice, and performance. Psychological Review,91,328-346.

大坊郁夫,安藤清志,池田謙一(1989)社会心理学パースペクティブ 1,誠信書房

Rotter,J.B. (1942) Level of aspiration as a method of studying personality, I.A critical review of methodology, Psychological-Review,vol.49, 463-474

上渕寿(1995)目標理論 宮本美沙子 奈須正浩(編) 達成動機の理論と展開の内 金子書房